

## カタクチイワシ瀬戸内海系群担当者会議議事概要

日程：令和5年11月21日（火） 14：00～17：00

会場：Teamsによるリモート形式

参加者：資源評価参画機関（以下、参画機関）、外部有識者（富山毅准教授）、水産研究・教育機構（以下、機構）

### <会議の目的>

令和5年5月30日に開催された第1回資源管理方針に関する検討会（カタクチイワシ瀬戸内海系群）における議論に基づき、水産庁より受けたカタクチイワシ瀬戸内海系群に関する試算依頼への対応を検討する。

### <水産庁からの試算依頼>

令和5年度資源評価の将来予測において、2024年に単発的に良い加入があった場合を仮定し、その下で漁獲管理した場合の将来予測と管理上のリスク評価を行っていただきたい。

### <機構からの説明内容の要点>

- ・2024年の単発的な良い加入として、通常加入期の再生産関係における50%、70%および90%範囲の上限の加入量を仮定した。
- ・その結果、単発的な良い加入を仮定しない場合よりも、2024年の算定漁獲量は、同じβ間で比較すると1万～3万トン程度多くなった。
- ・一方、2024年に単発的な良い加入が発生したという仮定の下で漁獲したものの、実際の2024年の加入量は再生産関係の確率分布に基づくものであった場合における、管理開始後10年間（2024～2033年）において一度でも親魚量が限界管理基準値案を下回る確率などのリスクについては、令和5年度の資源評価結果よりも、すべてのβにおいてかなり高い値となった。

### <質疑応答の概要>

**参画機関**：試算の条件については、水産庁と機構がやり取りした上で決定されたものなのか。水産庁の意図がよく分からない。ステークホルダー会合で受けた漁獲量が上振れた際の試算を行ってほしいという要望への対応なのか。

**機構**：試算をする上で水産庁とのやり取りは行っている。その中で、上振れの規模については、再生産関係の90%上限ぐらいの加入量が常識的な範囲だろうとなった。ただし、本系群については、90%上限ではリスクがかなり高くなるため、70%上限や50%上限についても試算することとなった。なお、水産庁が今回の試算結果をどのように利用するのかは不明であるが、カタクチイワシのように短命でかつ0歳魚において多く漁獲されるような魚種

については、良い加入があったその年の内に漁獲しないと、実質的に漁獲できるものを漁獲できなくなってしまうため、そのようなことは避けたいというような考えが背景にあると考えられる。

**参画機関**：太平洋系群でも同様の試算依頼はあったのか。

**機構**：太平洋系群および対馬暖流系群でも同様の試算依頼を受けたため、試算を行っている。

**参画機関**：条件 B については、2024 年の漁獲圧が非現実的な高い値になるといった、実際には起こりえないような獲り方となっているのではないか。

**機構**：ご指摘の通り漁獲圧が非常に高い値となっており、現実的ではない獲り方となっている。しかしながら、では漁獲圧にどのような制限を設けたらよいのかについても難しい問題のため、今回は制限を設けない形での試算を行った。

**参画機関**：今回は水産庁から受けた試算依頼への対応なので仕方がないが、ステークホルダー一合会で受けた要望を自分なりに解釈すると、過去に観察された最大の漁獲圧で漁獲したが、加入量がそれほど多くなかった場合にどれほどのリスクが生じるのかといった試算の方が、要望の意図に沿っていると考える。

**機構**：ご指摘いただいた案のように、漁獲圧を過去最大以下にするといった制限を入れることは可能と考える。今後、新たに試算依頼を受けた場合には、そのような案も含めて検討してまいりたい。

**参画機関**：今回の試算結果は非現実的な設定となっており、リスクが高いのは当たり前と言われるだけと考える。

**機構**：リスクが高くなった理由などについては上手く説明してまいりたい。

**参画機関**：条件 A については、2024 年に良い加入があった場合に漁獲管理規則案に従ったらどようになるのかという試算であるが、実際には TAC が決めているため、そのような獲り方はできないのではないか。

**機構**：カタクチイワシのように、良い加入があった場合には、その年の内に獲らないと翌年はどうなるか分からない資源に対して、例外的にどのような対応をしていくのか、例えばどの程度の漁獲量であれば追加的に漁獲できるのか、といったものを検討する上での情報にはなると考えられる。

**参画機関**：単発的に良い加入があった場合に、これぐらいまでの漁獲量であればリスクは低そうといったような使い方になるのか。

**機構**：本系群ではリスクが高い値となっているが、他の系群では管理開始後 10 年間に於いて一度でも親魚量が限界管理基準値案を下回る確率は 10%程度となっている。良い加入があった場合に 1 年待てない資源についての対応を検討する上での情報にはなるだろう。

**参画機関**：実際にそのような管理が可能なのかは分からないが、この程度獲った場合には、この程度のリスクが生じるというのを示したもののなか。

**機構**：その通りである。

**参画機関**：良い加入が発生したと判断する基準はどういったものか。

**機構**：スケトウダラ太平洋系群については、決められた基準を満たせば、漁獲量を1万トン前借りできる形となっているが、本系群の基準を決めることは非常に難しいと考える。

**外部有識者**：加入量が良い悪いという判断は、シラスがたくさん獲れたからといった基準に基づくのか、それともカタクチイワシとなった0歳魚が結果的に多かったからといった基準に基づくのか。

**機構**：どのような場合に加入量が良いと判断されるのかについては不明であるが、太平洋系群については、加入量の良し悪しを判断する基準の一つとしてシラスを利用する案が提示された。現時点においては、基準に関する要望を水産庁から受けていないが、もし仮に研究側にも協力を依頼された場合には、シラスの情報を利用する方向に進む可能性はある。

**外部有識者**：条件Bについては、獲り残して翌年の親魚にすべきものを減らしてしまった場合という理解で良いか。

**機構**：その通りである。

**外部有識者**：であれば、リスクが生じるのは当然の結果であり、コメントは難しい。

**機構**：条件Bについて更なる検討が必要となった場合には、アイデアを広く募ってまいりたい。

**参画機関**：ステップアップ管理に入った場合には、条件Bなどを想定してモニタリングなどを行う予定はあるのか。

**機構**：現時点でそのような予定はない。

**機構**：文書資料の書き方については機構に一任させていただく。

以上の質疑応答を踏まえて、カタクチイワシ瀬戸内海系群の試算依頼への回答について承認された。

#### <外部有識者講評>

今回は試算依頼についての対応ということで、それについての意見はない。一方、資源評価における不確実性や予期せぬことが起きた場合への対応を考えることは非常に重要と考える。資源が予想しない挙動を示したり、環境の変動などで資源を上手くコントロールできないといった中では、様々な可能性を探りながら試算を行ったり、それを修正していくといった試行錯誤の繰り返しを粘り強く続けていくことが重要なので、担当者や参画機関の方々

には引き続き頑張してほしい。

以上